



# 未知なる分野にも果敢にチャレンジする

土木設計を中心とした総合建設コンサルタントとして、道路や橋梁などの社会資本<sup>きょうりょう</sup>に関する調査や設計業務を手がけているジーアンドエスエンジニアリング（福岡市）は、「国を創り、国を守る」という使命感を持ち、年間200件を超えるさまざまなプロジェクトの受注を通じて、未来の街づくりに貢献している。

## 東京都建設局と九地整で 優良工事と局長表彰受賞



児玉 和久社長

本社のある福岡市と、創業の地である関東圏を営業地盤として創業してから47年間に積み上げてきた実績と信頼は、着実に評価を高めている。

近年では、2013年度から3年連続で、「東京都建設局優良工事等表彰」を受賞。同じく17年度、19年度（呑川防潮堤耐震対策詳細設計その7、仙台堀川護岸耐震対策詳細設計その6、妙正寺川整備工事に伴う修正設計）も表彰を受けた。また、同年度には「有明海沿岸道路標識詳細設計業務（18年度）」で九州地方整備局長表彰を受賞した。

昨年11月の東京都建設局優良工事等表彰の式典で、委託設計部門を代表してあいさつに立った児玉和久社長は「従来の枠組みにと

らわれない発想力と迅速な行動力、豊かな創造力を生かした設計・施工の検討会やプレゼンに注力してきた」と話し「引き続き若手採用に力を入れ、ベテラン技術者が持つ経験やノウハウの継承に努めたい」と力を込めた。

建設コンサルは、官庁や地方自治体の技術パートナーとして、道路、橋梁、河川構造物、下水道などについて、調査、企画、設計を手掛けている。

暮らしたに直結した社会資本の整備が主体で「国民の生活と安全を守る」（児玉社長）仕事求められる。近年手掛けた、水害から都市を守る地下調整池（福岡市博多区、春日市）の設計などは、例えとしてわかりやすい仕事なのかもしれない。

また、現在、進められている春吉橋掛け替え工事の設計も手掛けており、都市生活を支える重

## 令和元年度 建設局優良工事等表彰式



2019年度「東京都建設局優良工事等表彰」の設計委託部門を代表してあいさつする児玉社長

要なインフラ整備に貢献している。同橋は福岡都心部の大動脈の一つで、交通を停滞させることなく、回路などを設け、新たな橋を架ける大工事となっている。

一方、近年では建設コンサルとしての実績と経験を生かし、自治体などへのサポート業務も行ってきている。これは、自治体などが工事発注前に行う業務の一部を代行するPM（プロジェクトマネジメン

福岡県朝倉県土整備事務所が発注する工事に際し、必要となる工事の基礎的な調査などを請け負う。同県土整備事務所では初めてのケースだという。自治体が効率的な工事発注を行うためのサポート的な役割であり、発注者と緊密な連携で事業企画を練り上げていく建設コンサルならではの手腕が発揮されている。

さらに、新技術であるCIM（コンストラクション インフォメーション モデリング「マネジメント」）の取り組みにも注力している。CIMは、調査設計段階から3次元モデルを導入して、施工・維持管理までの一連の業務に生産性や品質向上を目指すもの。レーザースキャナーやドローンなどを活用し、3次元のデータを活用することで従来に比べて作業時間が大幅に短縮され、検査書類の削減にもつながる。1月には福岡市西区で約50人の自治体関係者を招いて、ドローンを活用した橋梁点検の現場見学研修会を開催した。

## 道の駅の情報案内板更新 新たな領域にチャレンジ

一方、従来の建設コンサルでは

取り組まないような仕事にもチャレンジしてきた。例えば、福岡県の移動式水素ステーションの設計業務。まったく畑違いの領域に社内では受注することに反対の声も上がったが、児玉社長は「従来の枠組みに捉われないチャレンジこそ会社を成長させる」として、見事にやりきった。

この時の実績を踏まえ、今年3月には、「道の駅おおう」（福岡県大任町）の情報提供装置更新設計業務委託を受注した。これは道の駅に設置されている情報案内板をリニューアルするもので、観光案内だけでなく、周辺の渋滞情報などもリアルタイムで発信する電子情報案内版となる。電子基



ドローンによる橋梁点検の現場見学会

盤などの構築が必要で、当然、建設コンサルが普段手がけている仕事とは異なる。だが、同社はチャレンジ精神を発揮し、新たな実績作りに取り組んでいる。児玉社長は「世の中で一番強いのは経験した人間。技術者は一つの専門分野に偏りがちだが、自分が知らない知識を怖がらずに、幅広い知見を身につけてほしい」と期待感を示す。

## あえて「昭和」な距離感で 家族的な組織づくりを

近年、同社は若手社員の採用に力を入れているが、人を育てる難しさを日々実感しているという。

そこで児玉社長は「あえて昭和の情感に戻す」ことを決断。家族的な会社組織づくりに注力している。

同社は昨年、社屋を増築したが、社長室は以前の場所と変えずにいる。その理由は、社長室から見える位置にタイムカードを置いていたため、社長室のドアを開けて、毎朝、社員が通る際の様子をチェックしている。「一目見れば社員がどんな状態なのか把握できる。元気のある無しだけでなく、悩みがないのかどうかもわかる。自分以後ろめたさがない社員は、目が合えばあいさつをするし、何かある社員は目をそらす傾向がある」とし、気になる社員がいる場合は上司を通じて、問題を抱えていないかどうかを把握する。一見、時代と逆行しているかのような緊密なコミュニケーションだが、これが功を奏し、以前よりも離職率が低下しているという。

同社長は、幼少時代から剣道に打ち込み、武道の道をまい進してきた。そのなかで得たのが、「勝負には負ける時もある。しかし、勝つまでやる」、つまり「勝つまで努力すること」の大切さだ。この精神で、建設コンサルとしての新たな事業領域を切り開きたい考えだ。



仕事環境の拡充のためリニューアルした本社社屋